

Title	死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか(分科会 3 死者儀礼・ 伝統習俗とどう向き合うか)
Author(s)	吉田, 隆
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.58, 2014.11 : 97-101
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5304
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

分科会3 死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか

死者儀礼・伝統習俗とどう向き合うか

吉 田 隆

序 なぜこのテーマか

日本における宣教、とりわけ地方における宣教を考える際に、表題のテーマは避けることができない。しかし、当分科会では、一般的な“文化受容”問題の文脈においてではなく、とりわけ二〇一一年に発生した東日本大震災以後、東北の諸教会が直面した現実において論じた。

二万人近い死者・行方不明者を出した被災地にあつて、その犠牲者を丁重に（時には宗教間協力によつて）葬ることの大切さを私たちは教えられた。果たして、そのような死者儀礼の意味とは何か。そして、そこにキリスト者（とりわけ宗教者としての牧師）が関わることの意義は何か。それを丁寧に考えることが、当該問題に新たな光を与えるであろう。

1. 震災と死者儀礼——東北ヘルプの取り組み

震災一週間後に設立された「東北ヘルプ」による活動初期に、「死者への配慮」をしなくてよいのかという問いかけがあった。考えてもみなかった問いであったが、この質問の背後には自死対策における遺族へのケアの必要性の訴えがあった。愛する者を突然失った者にとって、きちんと弔いすることは、遺族のその後に大きく影響するとの指摘である。

東北ヘルプは、地元仏教会と共に仙台市に願ひ出た結果、市側から、斎場内に宗教相談窓口を設けること、ボランティアで簡単な儀礼を行うこと、控室を用いて（無料）相談を行うことの許可を得た。宮城県宗教学法人連絡協議会は、この一連の動きに理解を示し、相談所を設置。仙台仏教会・仙台キリスト教連合協働で、これにあたることを承認した。

こうして、仏教者とキリスト者（牧師・神父）が斎場に常時待機し、葬送儀礼を始め、医療や法律相談の受付窓口としても機能する「心の相談室」を立ち上げた。奉仕者は、遺族に「寄り添う」ことに徹し、決して宗教の「押し付け」をしないこと。遺族のグリーフケアを主眼として弔いを行うこと。他宗教・行政との協働であることを重視し、他者への敬意を忘れないこと、等を基本としたガイドラインに沿った活動を行うことを申し合わせた。

「心の相談室」は斎場における活動を五月で終えたが、この協働の重要性が認められ、電話相談として継続。また、同名のラジオ番組も制作されて今日に至っている。さらに、これが元になって、東北大学における「臨床宗教師（日本版チャプレン）」養成の寄附講座も開講された。

2. 死者儀礼についての聖書の例

そもそも、聖書は死者儀礼、とりわけ土着のそれについて、どのように述べているのか。代表的な例を二つほどあげてみる。一つはイスラエルの父祖ヤコブの埋葬であり、もう一つはイエスの埋葬についてである。

(1) ヤコブの埋葬

エジプトの地で地上の生涯を終えたヤコブの埋葬の詳細が、創世記五〇章に記されている。ヤコブの亡骸は、エジプトの医師たちによってミイラ処理され、エジプト人は「たとい形式的であったにせよ」七〇日間喪に服し（二一―三節）、盛大な葬送行列によってカナンの土地へと運び込まれ（九節）、そこで荘厳な葬儀が執り行われた（一〇節）が、「あれは、エジプト流の盛大な追悼の儀式だ」と言われるほどであった（一一節）。

この記事を、イスラエル民族の父祖ヤコブが異教的に葬られた「屈辱」の記録と読むことはできない。むしろ、小さな者が主の不思議な導きの中で（少なくとも地上的には）大いなる最後を遂げるに至った恵みの出来事として読むべきであろう。

(2) イエスの埋葬

イエスの埋葬もまた、きわめて当然のことながら、当時の「ユダヤ人の埋葬の習慣に従い」葬られた（ヨハネ一九・三八―四二）のであって、決して「キリスト教」式ではない（そもそもキリスト教式葬儀の規定などない）。そして、

この記事もまた、上記ヤコブの埋葬同様、アリマタヤのヨセフの勇氣ある行為（マルコ一五・四三）による称賛すべき出来事として記されている。

3. “まるごと”の福音

(1) 人間の尊厳

上記の聖書箇所から学べることは、聖書は決して一律の葬送儀式を規定していないということ。むしろ土着の文化様式よりは遺体を丁重に葬ること自体の重要性に注目していることである。そこに、故人に対する神の恵みや人々の敬意、また遺された者たちの愛情が表されるからである。別に言えば、遺体は単に朽ち行くモノではなく、“神のかけ”（創世記一・二七）として造られた人間の尊厳を帯びた御遺体だということである。

(2) 悲しむ者への慰め

イエスは、ある母親の一人息子の葬列に遭遇した際、「母親を見て、憐れに思い」不浄の棺に手を触れられた（ルカ七・一一―一四、新共同訳）。また、ラザロを失い途方に暮れているマルタや村人を「見て、心に憤りを覚え、興奮して……涙を流された」（ヨハネ一一・三三―三五）。ここでもイエスの関心は、愛する者の死に対してどこまでも無力な人間たちの悲しみである。悲しみを引き起こした死そのものに憤りを感じるほどに、悲嘆に暮れる人々にイエスは寄り添い、それを超える神の力を示す。

「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣く」（ロマ一二・一五）模範を示されたのは、イエスご自身である。イエスの視

点は絶えず「倒れている者の視点」であり（ルカ一〇・三六）、その行動規範は人間の破れを癒やす「まるごと」の福音である。

結語 この世における教会・キリスト者（とりわけ聖職者）の意義

従来、この世における教会やキリスト者の役割を語る際、しばしば預言者的役割が強調されてきた。しかし、このたびの震災を通して、それに勝るとも劣らぬ祭司的役割の重要性を教えられたように思う。死者を弔い遺族を慰め、死に對して無力な人の悲しみに慰めをもたらす、文字通り宗教者としての「祭司」的役割である。

宗教とは人の最も深い魂に関わるものであるがゆえに、人をまるごと愛する愛にはその人の信仰への敬意も含まれる。それは、その宗教や教義を無条件に肯定することを必ずしも意味しない。死者儀礼にせよ伝統習俗にせよ、問題はそこに表される人の心である。そのような視点を持つことが宗教の「公共性」につながり、そこに積極的に関わることによつて、むしろキリストの福音の独自性と力が発揮されるのではないだろうか。